

テーマ「郷土の偉人」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今週は，毎月第3週に，奄美にゆかりのある作家や偉人を紹介するシリーズ「郷土の偉人」の第4回目です。

今回は，鹿児島県教育委員会発行『続 郷土の先人 ^{ふくつ}不屈の心 小学校上学年用』から，大島紬を全国に広め，その制作技術の向上に努めた「丸田 ^{まるた}^{けんぎ}兼義」を紹介します。

兼義は，江戸時代の終わり頃の1857年，名瀬に生まれました。父親は兼義が4歳の時に亡くなり，母親一人に育てられました。裕福な家庭ではなく，十分な教育も受けられませんでした。兼義は手先がとても器用で，また，やり始めたことは最後までやり通す，粘り強さのある子どもでした。

兼義が成長して青年となった明治時代，奄美大島の人々の暮らしは，サトウキビの収穫に支えられていましたが，サトウキビの栽培は気候に左右されて台風などの被害も大きく，決して楽なものではありませんでした。

一方この頃になると，ほんの少しずつですが大島紬も商品として作られ始め，やがてその紬を買い取って大都市の市場^{しじょう}へ売り出そうと，島外からの商人がやって来るようになりました。気候に左右されるサトウキビだけでは島の人々の暮らしは維持できないと危機感を持っていた兼義は，その様子を興味深く見つめました。紬は島の産業として成り立つのではないかと考えたのです。

「どうすれば，大島紬の素晴らしさをもっと広められるだろうか。島の一大産業に発展させるにはどうしたらよいだろうか。」兼義は，そのことを考え続けました。

兼義が紬の研究開発に取り組んでいた，1890年（明治23年），大島紬を全国に知ってもらうチャンスがやってきました。第3回内国勸業博覧会^{ないこくかんぎょうはくらんかい}が，東京の上野で開かれたのです。この機会を逃してはいけないと，兼義は紬を出品しました。

兼義が出品した紬は，当時の紬としてはかすり模様がより細かく織られており，大好評で迎えられました。その後，紬の販売先は一気に関東にまで広がりました。1892年（明治25年）頃には，大島紬の名前は全国的に知られるようになり，販売先もさらに広がりました。

ところが、状況は一変します。奄美大島の中でも紬作りは産業として認められ、さらに発展しようとしていたその矢先、大変な事が起きてしまいました。一部の人達が、本来の作り方を守らないで紬の品質を落とし、その分たくさん作って売ろうとしたのです。

しかし、それでは大島紬の信用が失われてしまいます。清く正しいことを誇りとする兼義は、紬の品質を守ろうと質の悪い製品を作る人たちを説得して回りました。

1897年（明治30年）頃には、大島紬は奄美の経済の中心となっていました。以前からの悪事は、まだ一部で続いていました。そこで兼義は、紬の組合を作ることを考えます。

けれども、組合は簡単にはできませんでした。「組合が何の役に立つのか。」と非難されたり、「自分たちのためだけに作ろうとしているのだろう。」と、陰で悪口を言われたりしました。

みんなを説得するために、兼義たちは福岡や久留米^{く る め}に渡り、そこにある組合がどんな活動をしているのかを勉強しました。そして島に帰ると、今まで以上に力を入れて、組合がなぜ必要なのか、組合で何ができるのかを、寝る間も惜し^{ま お}んで説得して回りました。

努力は報^{むく}われ、1901年（明治34年）、ついに大島紬同業組合が結成されます。組合が行った厳^{げん}格な製品検査は、紬全体の品質を守る効果を生み、大島紬の評価は、全国でさらに高まっていきました。

放送時間の都合で、一部端折^{はしよ}って紹介しましたが、『続 郷土の先人 不屈の心 小学校上学年用』では、このように丸田兼義のことを紹介しています。

この冊子は、道徳の時間などで副読本として使えるように、鹿児島県教育委員会が発行し、各小学校に配布されています。奄美図書館にも、一般利用者の閲覧に供するために寄贈されています。

子どもたちが、現在どのような教材で郷土の先人について学習しているのかを知ることができる貴重な資料でもあります。前の年に発行された中学生用も併^{あわ}せて、奄美図書館2階郷土コーナーにありますので、御来館の際は、ぜひ手にとってご覧下さい。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。